

稲・大豆作情報（NO. 4）

Ⅰ. 水稻作況情報田の生育概況（7月23日現在）

品 種 場 所	移植日 栽植株数	年 次	現在の生育状況				概況
			草 丈 c m	茎 数 本/㎡	葉 齢	SPAD	
夢しずく 佐賀市本庄町	6/17 18.0株/㎡	本 年 平 年 平年比	65.9 64.0 (103)	375 354 (106)	11.2 10.5 (+0.6)	42.2 41.0 (+1.2)	6月27日の梅雨明け以降、平年より高温・多照で経過している。 ○草丈は「夢しずく」で平年並み、「さがびより」「ヒヨクモチ」は平年よりやや低い。 ○茎数は「夢しずく」が平年より多く、「さがびより」、「ヒヨクモチ」で平年より少ない。 ○葉齢は「夢しずく」で平年よりやや進んでおり、「ヒヨクモチ」で平年並み、「さがびより」で平年よりやや遅れている。
さがびより 小城市芦刈町	6/22 18.4株/㎡	本 年 平 年 平年比	46.3 52.2 (89)	332 414 (80)	9.9 10.4 (-0.5)	37.4 40.1 (-2.7)	
ヒヨクモチ 神崎市千代田町	6/20 16.0株/㎡	本 年 平 年 平年比	42.0 45.3 (93)	534 624 (86)	10.8 10.8 (±0)	42.1 40.8 (+1.3)	
ひなたまる 佐賀市大和町	6/20 18.4株/㎡	本 年 平 年 平年比	49.0 - -	377 - -	10.6 - -	40.6 - -	

注1) 各品種 前作：麦

注2) 施肥及び病害虫防除は地区基準に準ずる

注3) 平年値は、過去10年間（H27～R6）の平均値（さがびよりについては、R1年を除くH27年～R6年の平均値）

注4) ヒヨクモチは昨年度から神崎町のデータを用いています

注5) ひなたまるはR7年から作付けのため、本年のみの記載になります。

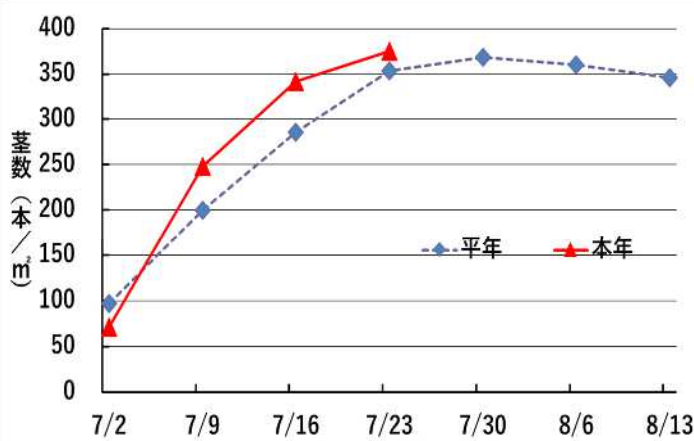


図1 夢しずく茎数の推移

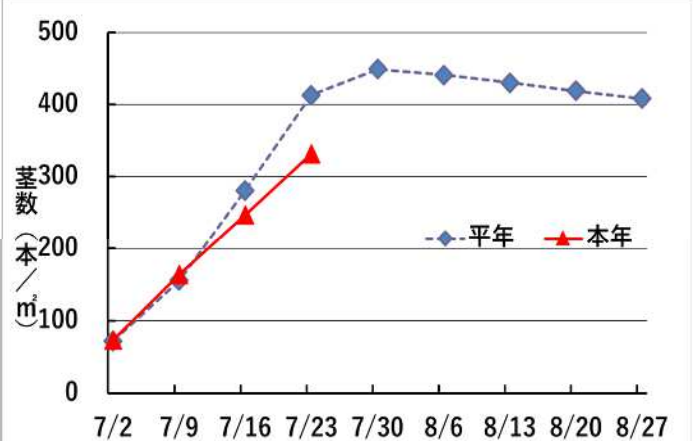


図2 さがびより茎数の推移

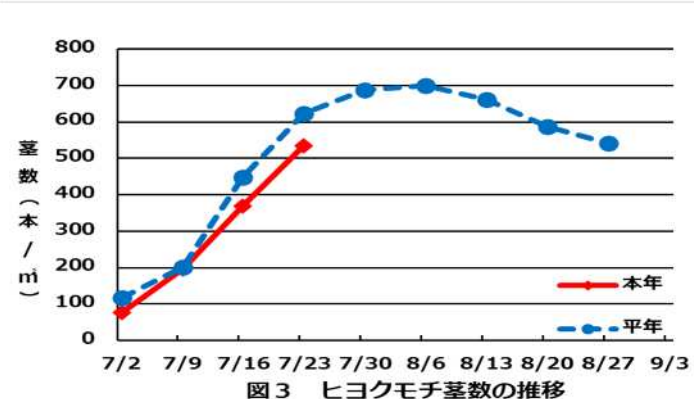


図3 ヒヨクモチ茎数の推移

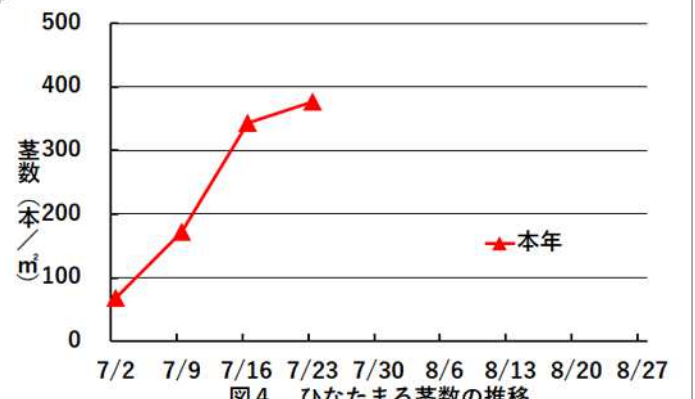


図4 ひなたまる茎数の推移

◆農業試験研究センター米づくり情報4号 7月23日(抜粋)

移植日	項目 品種	年次	草丈 cm	茎数 本/m ²	葉齢 L	葉色 SPAD	概況 (平成または前年との比較)
6月18日	夢しずく	本年	64.2	361	10.5	40.3	【気象】 7月16日～22日まで ◆平均気温…1.5℃高い ◆日照時間…長い (平成比 124%) ◆降水量…少ない (平成比 45%) 【生育】 ◆草丈 「ヒノヒカリ」は平成並み、その他の品種は高い。 ◆茎数 「夢しずく」、「ヒノヒカリ」で少なく、その他の品種は多い。 ◆葉齢 「夢しずく」は平成並み、「ヒノヒカリ」、「さがびより」、「ヒヨクモチ」はやや進んでいる、「ひなたまる」は進んでいる。 ◆葉色(SPAD値) 「夢しずく」はやや濃く、その他の品種は平成並み。
		平成	59.8	406	10.4	39.2	
		平成比(差)	107	89	(+0.1)	(+1.1)	
	ヒノヒカリ	本年	54.5	480	11.0	41.0	
		平成	53.8	558	10.5	41.3	
		平成比(差)	101	86	(+0.5)	(-0.3)	
6月20日	ひなたまる	本年	62.7	459	11.3	44.2	
		前年	57.5	275	10.7	43.9	
		前年比(差)	109	167	(+0.6)	(+0.3)	
	さがびより	本年	55.1	537	10.8	41.1	
		平成	49.7	502	10.4	41.2	
		平成比(差)	111	107	(+0.4)	(-0.1)	
6月20日	ヒヨクモチ	本年	55.3	892	11.4	42.7	
		平成	47.9	816	11.0	43.1	
		平成比(差)	115	109	(+0.4)	(-0.4)	
	留意点	本年					
		平成					
		平成比(差)					

※耕種概要等は前号参照。

2. 水稻における今後の管理

○水管理

「夢しずく」

- ・早植えの「夢しずく」(5月下旬～6月上旬移植)は、幼穂形成期を迎えており、普通期の「夢しずく」(6月中旬移植)は、間もなく幼穂形成期を迎える。
- ・幼穂形成期を迎えた圃場は中干しを終え、穂ばらみ期まで「間断冠水(2日湛水3日落水)」を実施する。その後、穂揃い期まで浅水状態で湛水を保つ。

「ヒノヒカリ」、「ひなたまる」、「さがびより」、「ヒヨクモチ」

- ・1株あたり茎数が20本以上確保できた圃場は、次ページの表1を参考に「中干し」を実施する。
なお、中干しは土に軽い亀裂が入り足跡がわずかにつく程度とし、中干し後は間断灌水を行う。
- ・「ヒノヒカリ」、「ひなたまる」は8月上旬頃から幼穂形成期を迎える。
- ・幼穂形成期以降は、稲が水を必要とする時期なので、「中干し」は遅くとも8月上旬までに終え、穂揃い期まで浅水で湛水状態を保つ。

※移植が遅れた圃場などで、茎数が不足している圃場では、分けつ数確保のため7月下旬まで浅水管理を基本とするが、遅くとも8月5日までには中干しを終了する。

○水管理 ～ 圃場の状況に応じた水管理の徹底 ～

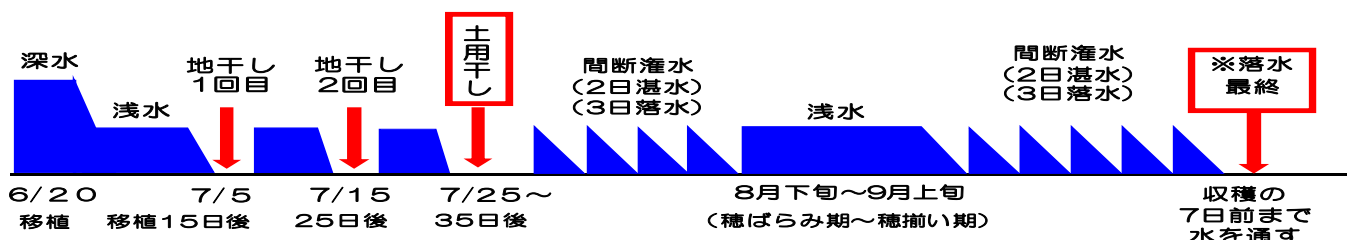


表1 品種別の中干し時期

品種	目標穂数 本/㎡	有効茎数(中干し時期)		
		50株/坪(15.2株/㎡)	60株/坪(18.2株/㎡)	70株/坪(18.2株/㎡)
夢しずく	360	24本/株	20本/株	—
コシヒカリ	370	24本/株	20本/株	—
ひなたまる	340	—	19本/株	16本/株
さがびより	370	24本/株	20本/株	—
ヒヨクモチ	440	25本/株	24本/株	—

注1) 幼穂形成期は、「ひなたまる」、「コシヒカリ」、「さがびより」で8月上旬頃、「ヒヨクモチ」で8月中旬頃となるため、8月上旬までは中干しを終える。

○生育状況(中干し時期の圃場の様子 ~写真を参考に中干し時期を決定する~)



○雑草防除

- ・除草剤散布ができなかった圃場や散布が遅れた圃場、及び処理後に田面が露出した圃場等では、ヒエや広葉雑草が繁茂している圃場も見受けられる。放置すると薬剤による雑草防除が困難となるため、中後期除草剤との体系処理を検討する。なお、藻類や表層剥離が多発し除草効果の低下が懸念される圃場でも、雑草の発生が懸念されるため、圃場の状況を確認し、中後期除草剤との体系処理を検討する。

対象	除草剤名	使用時期	備考
ヒエ類	クリンチャー I 粒剤	移植後 7 日～バ IE 4L 但し、収穫 30 日前まで	湛水散布 (3～4 日は湛水)
	クリンチャー EW	移植後 20 日～バ IE 6L 但し、収穫 30 日前まで	落水散布。展着剤加用。
	ヒエクリーン I 粒剤	移植後 15 日～バ IE 4L 但し、収穫 45 日前まで	湛水散布 (3～4 日は湛水)
広葉雑草	バサグラン粒剤	移植後 15 日～55 日 但し収穫 60 日前まで	落水～ごく浅く湛水散布。 最低 3 日間入落水しない。
	バサグラン液剤	移植後 15 日～55 日 但し収穫 50 日前まで	高温条件下では、薬害が生じやすいので夕方散布。
ヒエ類 および 広葉雑草	クリンチャーバス ME 液剤	移植後 15 日～バ IE 5L 但し収穫 50 日前まで	落水～ごく浅く湛水散布。最低 3 日間入落水しない。高温条件下では、薬害が生じやすいので夕方散布。(展着剤無加用)
	フォローアップ I 粒剤	移植後 15 日～バ IE 5L (稲 4 葉期以降) 但し、収穫 60 日前まで	湛水散布 (3～5 日は湛水)
	ワイドアタック SC	移植後 20 日～バ IE 6L (稲 5 葉期以降) 但し、収穫 30 日前まで	落水～ごく浅く湛水散布。(展着剤無加用)
	ロイアント乳剤	移植後 20 日～バ IE 5L 但し、収穫 45 日前まで	落水散布～ごく浅く湛水散布。

○穂肥（「夢しずく」）

- ・早植えの夢しずく（5月下旬～6月上旬移植）では、穂肥施用時期を迎えている（幼穂長1～5mm程度）。
- ・普通期の夢しずく（6月中旬移植）では、間もなく幼穂形成期を迎える。
- ・幼穂形成期を迎えた圃場は中干しを終え、穂肥施用時は湛水し、その後地固めと根に空気を送るため、穂ばらみ期まで「間断冠水（2日湛水3日落水）」を実施する。なお、施用時期が遅れないように表2の穂肥診断基準（草丈・葉色・幼穂長の確認）に基づき、穂肥を施用する。
- ・いもち病が発生している圃場は、穂肥施用によりいもち病の発生を助長する可能性があるため、施用にあたっては十分注意する。

表2.「夢しずく」穂肥診断基準

幼穂形成始期の 草丈	葉 色	施 用 時 期		穂肥施用量、()は山麓	
	葉緑素計	出穂前	幼穂長	N成分 kg/10a	BB602 kg/10a
73cm以下	34以下	20～22日	1 mm	2.0 (3.0)	12.5(20.0)
	34～38	18～20日	2 mm	1.5	10.0
	39以上	施用しない			
73～79cm	34～39	18～20日	2 mm	1.0 (1.5)	6.0 (10.0)
	40以上	施 用 し な い			
80cm以上	原則として施用しない				

※草丈は、幼穂の伸長程度により幼穂形成期（1mm）を基点に、前後1日あたり1cm増減する。

※出穂前15日以降の穂肥は、玄米タンパク値を上昇させるので施用しない。

「ヒノヒカリ」

- ・「ヒノヒカリ」は、8月5～8日頃に幼穂形成期を迎え、穂肥施用時期を迎える見込みです。
- ・施用時期が遅れないように表3の穂肥診断基準（草丈・葉色・幼穂長）に基づき、穂肥を施用する。

★「ヒノヒカリ」の穂肥施用のポイント

- ①出穂前18～20日（幼穂の長さ3～5mm）に施用。
- ②草丈が80cm以上で葉色が濃い（SPAD値40以上）場合は施用しない。
- ③草丈が80cm以下で、葉色が薄い（SPAD値34以下）場合は、2日程度早める。（出穂前22～20日で幼穂長1～2mm）に施用。

表3.「ヒノヒカリ」穂肥診断基準

幼穂形成始期の草丈	葉 色	施 用 時 期		穂肥施用量	
	葉緑素計	出穂前	幼穂長	N成分 kg/10a	BB602 kg/10a
80cm以下	34以下	20～24日	1～2mm	3.0	20.0
	34～38	18～20日	3～5mm	3.0	20.0
	38～39	16～18日	5～15mm	2.0	12.5
	40以上	—	15～30mm	—	施用しない
80cm以上	34～38	18～20日	3～5mm	2.0	12.5
	38～39	16～18日	5～15mm	1.5	10.0
	40以上	—	15～30mm	—	施用しない

※隣接圃場が「ヒヨクモチ」だと葉色が淡く見えますので留意してください。

「ひなたまる」

- ・「ひなたまる」は、8月5～8日頃に幼穂形成期を迎え、穂肥施用時期を迎える見込みです。
- ・施用時期が遅れないように下の穂肥施用のポイント（草丈・幼穂長）に基づき、穂肥を施用する。

★「ひなたまる」の穂肥施用のポイント

- ①出穂前 18～20 日（幼穂の長さ 5mm 程度）に施用。
- ②草丈が 80 cm 以下の場合、窒素成分で 3 kg/10 a（BB602 で 20 kg/10 a）を施用する。
- ③草丈が 80cm 以上 85 cm 未満の場合は、地力に応じて減肥する。
- ④草丈が 85cm 以上の場合は、穂肥施用は控える。

※出穂前 15 日以降の穂肥は、玄米タンパク値を上昇させるので施用しない

○病害虫情報（発生および防除）

- ・今後も高温が続く見込みであり、高温・少雨の条件下では害虫の発生が多くなるため、発生状況を確認し、適期防除を実施する。
- ・セジロウンカとトビイロウンカは 6/16、6/22～23 に飛来が確認されている。
- ・コブノメイガは 6/16、6/25 頃に飛来が確認されている。
- ・今後、発生予測は随時更新されるため、防除の考え方等については、最新情報を農業技術防除センターのホームページで確認してください。

佐賀県 農業技術防除センター



図 トビイロウンカ各世代の発生予測（第2版、2025年7月18日作成）



図 コブノメイガ各世代の発生予測（第2版、2025年7月18日作成）

【斑点米カメムシ類】

- ・8月の気象予報では、気温が高く、多発生条件となっている。
- ・出穂後の除草は、水田に斑点米カメムシ類を誘い込み被害に繋がるため、出穂10日前までに畦畔除草を行う。
- ・山麓部や河川敷付近など、例年発生の多い圃場では田廻りを励行し、防除を徹底する。
- ・防除はカメムシが穂に上ってくる夕方に行うと効果が高い。

表4. 各品種別の草刈り時期の目安

品種名	出穂期（平年）	出穂10日前
夢しずく	8/16	～8/6頃まで
ヒノヒカリ・ひなたまる	8/27	～8/17頃まで
さがびより	8/30	～8/20頃まで
ヒヨクモチ	9/10	～8/31頃まで

※出穂期（平年）は、佐城管内における情報田のデータの平均値

【イネカメムシ】

- ・イネカメムシは、近年全国的に被害が拡大している斑点米カメムシの一種です。昨年、本県において広く分布していることが確認されています。本種は、水稻の出穂始めに籾を吸汁して不稔にし、大きな減収被害を生じさせます。他の斑点米カメムシ類とは異なる特徴があり、適期の本田防除が必要となります。

（防除対策）

- 1) 圃場内をよく観察し、本種の早期発見に努める。特に、周辺より出穂が極端に早い、又は遅い圃場では、本種の飛来が集中するため、発生状況を注意深く観察する。
- 2) 出穂前に本種の発生を認めた圃場では、通常の斑点米カメムシ類の防除適期である穂揃い期～乳熟期の防除だけでなく、発生状況に応じて出穂期の薬剤散布を実施する。



イネカメムシの成虫（左）及び幼虫（右）

○台風対策（台風の接近が懸念される場合の事前及び事後対策）

- ・台風接近時 → ①強風による稔実阻害（不稔、白穂などの発生）や登熟阻害（籾ズレにより病気や雑菌の感染）が懸念されるため、深水管理とし稲体の振動を少なくする。
②いずれの品種も、茎葉の繁茂度が高く、水分の蒸散量が著しい時期となるため、必ず深水・湛水を行う。（中干し中であっても必ず深水管理とする）
- ・台風通過後 → ①茎葉の損傷により根の老化が進むことがあるので、台風通過後は必ず新しい水と入れ替えて、こまめに間断灌水を行い、根の機能維持・生育回復に努める。
②水田に海水流入による浸冠水や潮風害を受けた場合は、直ちに排水し真水と入れ替える。
できれば掛け流しを行って除塩するか、少なくとも2～3回は水を入れ替え、生育回復に努める。
③台風通過後は受光体制が乱れ、ウンカや白葉枯れ病等が発生しやすくなるため、トビイロウンカの発生には十分注意し、場合により薬剤防除を検討する。

【紋枯病】

- ・8月の気象予報では、気温が高く、多発生条件となっている。
- ・近年、多発傾向にあるため、発生を認めた圃場では病斑が上位の葉鞘に進展（垂直進展）する時期に防除を徹底する。（液剤、粉剤の場合は出穂10～20日前を目安とする）
- ・病斑が上位3葉の葉鞘に達している場合は直ちに薬剤防除を行う。

3.大豆における今後の管理

1 大豆の生育状況

- ・ 本年は梅雨明けが早く、播種作業は順調に進み 7/24 現在、大部分の播種は終了している。
- ・ 7月上旬に播種した圃場では、3～4 葉期となっている。
- ・ 7月中旬頃に播種された圃場では、初生葉～本葉の展開期を迎えている。



写真1 生育状況（7/23撮影 7月3日播種）



写真2 生育状況（7/23撮影 7月12日播種）

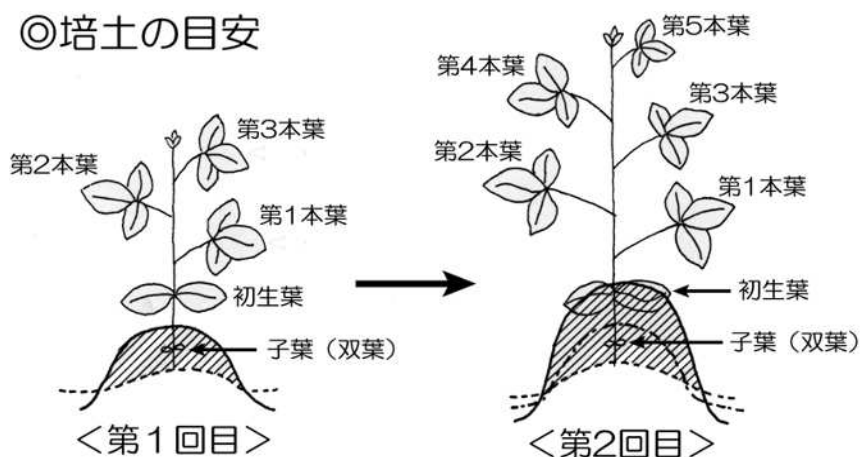
2 今後の管理

1) 中耕・培土の実施

- ・ 7月上旬播種：すでに1回目の培土時期を迎えている。本葉が3枚開いているのを確認したら子葉が隠れる程度まで1回目の培土を行う。
その後、本葉が5枚開いたのを確認したら、2回目の培土を初生葉（子葉の上の葉）が隠れる程度まで行う。
- ・ 7月中旬播種：間もなく1回目の培土時期を迎える。本葉が3枚開いているのを確認したら、子葉が隠れる程度まで1回目の培土を行う。

中耕・培土は、1回目を3葉期頃、2回目を5葉期頃に実施する。
2回目は、株元（子葉の下）まで土がしっかりかかるように実施する。

◎培土の目安



【高温・干ばつ時の中耕・培土の注意点】

1. 開花期近くの培土・・・×
うね間に張り出した根量が多く、大豆へのダメージが大きい。
2. 日中、高温時の作業・・・×
断根に加え、大豆の蒸散量が大きく、ダメージが大きい。
3. 株元まで土がかかっていない・・・×
培土の目的である不定根の発生、根粒菌の活性化、倒伏軽減が不十分。

※特に、降雨等で除草剤の散布ができなかった圃場では、早めの中耕培土で雑草対策を行う。

2) 干ばつ対策について（梅雨明け後、降雨が見込めない状況の場合）

○高温乾燥が予測される場合の対策

- ・ コルゲート管の閉栓が土壤水分確保に有効である。



【畝間灌水のポイント】

- ・ 圃場が白乾しひび割れした状態になる前に灌水を行うようにする。
(過乾燥状態になると土壤内部に亀裂が入り、畝間灌水しても圃場の先端まで水が行き渡らない。)

3) 病害虫対策について（発生及び防除）

①【ハスモンヨトウ】

- ・ 夏季が高温少雨で経過した年は、発生が多く増殖に伴う被害拡大が懸念されるため、フェロモントラップの捕殺数や圃場毎に白変葉の増加に注意する。
- ・ 播種期が早い圃場では、例年8月中旬頃からハスモンヨトウの幼虫が散見され始める。
- ・ 防除適期は、若令幼虫による白変葉が見られ始めた頃であり、防除が遅れ中令幼虫以上（体長約2cm以上）になると、防除効果が低下する。
- ・ 防除後約3日経過した後も高い密度で食害を続けている時は、再防除が必要である。
- ・ ハスモンヨトウには、フェニックスフロアブル、プレバソンフロアブルは感受性が低下しており、使用を避ける。

②【オオタバコガ・ウワバ類】

- ・ 気象予報では高温少雨が予測され、ハスモンヨトウと同様に、多発生の条件となっている。
- ・ 葉に大きな穴が開いた株が目立ち、周辺に青虫がいる場合は、オオタバコガによる食害の可能性が高くウワバ類やシロイチモジヨトウが含まれる場合もある。
- ・ オオタバコガやシロイチモジヨトウには、ノーモルト、トレボン感受性が低下しており、使用を避ける。

4) 雑草防除について

①播種後対策

播種直後に土壌処理剤を散布し、雑草防除を行う。特に、近年問題となっているホオズキの発生が多い圃場では、「ラクサー乳剤」「フルミオ WGD」、アサガオの発生が多い圃場では、「ラクサー乳剤」「サターンバアロ乳剤」との混用が効果的である。

土壌処理除草剤の効果を高めるため、碎土・整地を丁寧に行い、播種後の鎮圧を必ず実施する。液剤の場合は、使用基準内で、多めの散布水量で散布する。

なお、播種直後の散布でも隣接圃場の水稻へドリフト防止のため風速と風向きに注意し、風が強い日には散布しない。

②難防除雑草への対応

アサガオ類やホオズキ類の難防除雑草の発生が多い地域では、圃場内侵入防止に努め、見つけ次第手で抜き取る。

圃場内に発生している場合、多発すると大豆の作付け自体が困難になるため発生が少ないうちに、雑草の開花や結実前までの茎葉処理除草剤のスポット処理や手取りの防除に努める。

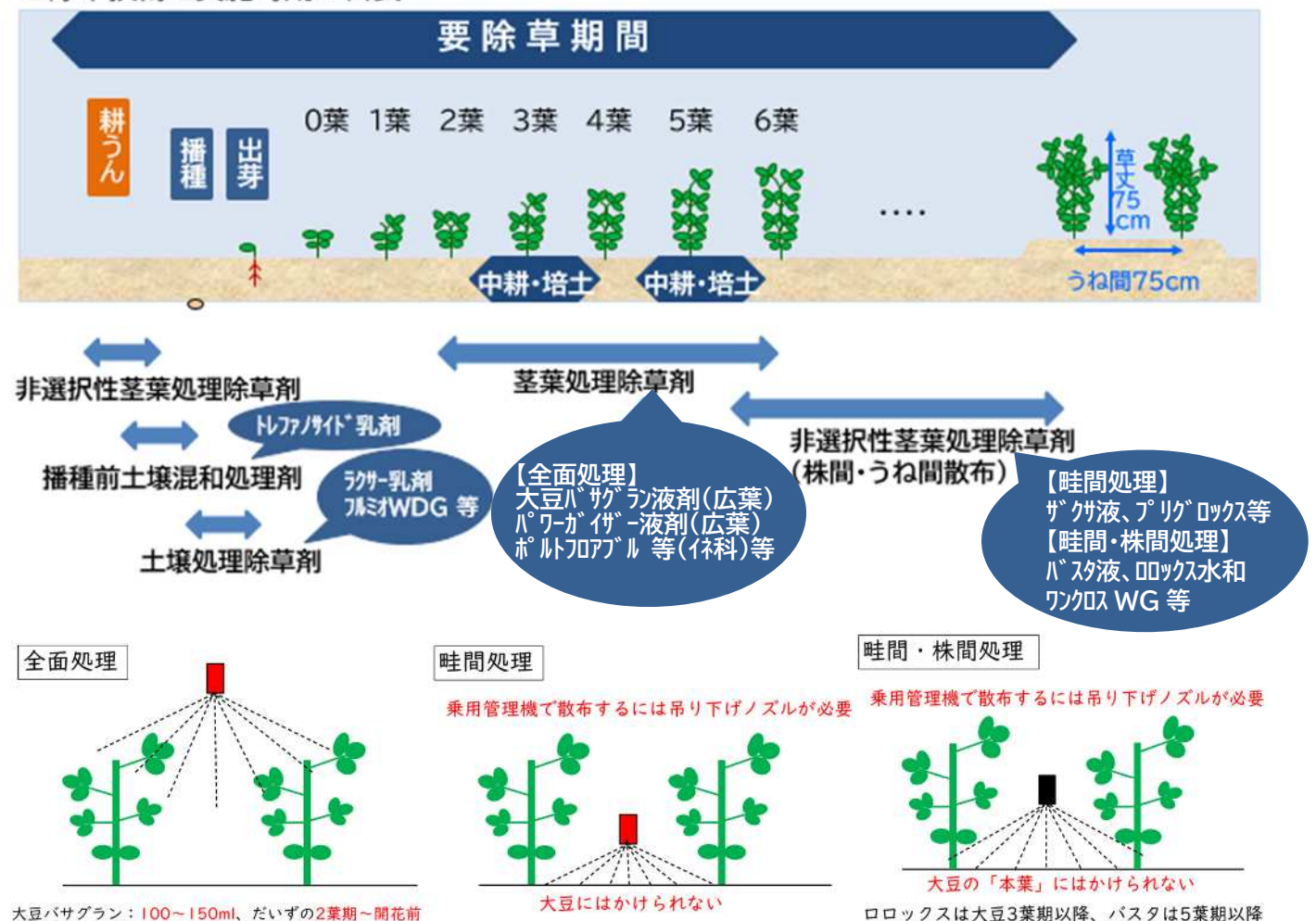
ツユクサ類（近年、特にカロライナツユクサが蔓延）は土壌処理剤の効果が十分ではないため、「プリグロックスL」や茎葉処理剤（大豆バサグラン等）での除草を基本とする。

③大豆は初期生育が早く、大豆の茎葉が繁茂することで雑草発生を抑制できるので、

雑草の発生が少なければ、大豆生育期（2～5葉期）に中耕培土で防除が可能である。

※降雨等で除草剤の散布ができなかった圃場では、早めの中耕培土で雑草対策を行う。

■除草技術と実施時期の目安



令和7年産水稻・大豆生育期間気象グラフ（アメダス：佐賀）

佐城農業振興センター

